



写真・長澤直子

## 評

マハゴニー市の興亡 (絨毯座)

なんと豊かなオペラなのだろう。支離滅裂なようにいながら、十分に劇的なブレヒトの台本、そして下卑た大衆歌から聖性を帯びた難曲までもが詰めこまれたクルト・ヴァイルの音楽。この両者が奇妙なまでの切迫さに貫かれながら、物語を織りなしてゆく。

絨毯座の公演は、こうした特性を存分に生かしたと、まずはいえる。2台のピアノ、電子オルガン、鍵盤ハーモニカなどを臨機応変に用いて「カネと欲」の町マハゴニーを描きだす器楽奏者たちのアイディアはいちいち冴えており(音楽監督・横山修司)、歌手も浅原孝夫(ジム)、森山京子(ベックビック)をはじめとして、演技に艶がある。セリフの日本語の聴き

## 舌を巻く手練れの演出

やすさ、音楽の鍵となる重唱部の精度も文句なし。

そしてなにより演出の恵川智美。舌を巻く手練れなのだ。たとえば第2幕、大食や情欲におぼれる人々を描く場面は見事な泣き笑いを構成していたし(おどろくほどシンプルな道具立てなのに!)、インチキ裁判で処刑されるにいたるジムの心境の変化も、不思議に説得的。観客の誰もが、知らぬ間に町の住人たちと共振し始め、その快楽と悲惨を一緒に体験したことだろう。

もっとも、小さな違和感を終始覚えていたのも事実。演出も音楽も美術も、少しだけ、ほんの少しだけトーンが「暗い」のだ。もちろん、人間の放埒を描きながら全体主義と資本主義に断固として抗う原作は、本質的にとても暗い。しかし、だからこそ、舞台は徹底して華やかで明るくあらねばならないようにも思う。むしろ、それが爽快なまでに明るいほど、本作のアイロニーは、より深みと絶望を増すのではなからうか。

(音楽評論家 沼野雄司)

——2日、水天宮前・日本橋劇場。